

2018 年度活動報告

2011 年の東日本大震災による原発事故から 8 年が経過しました。

福島第一原子力発電所では、原発事故収束のための危険な作業が続き、安心というには程遠い日々が続いています。

しかし、その危険な状況がメディアで報道されることは少なく、一般の人々がこの問題について情報を得られる機会はわずかとなっています。

2020 年には東京オリンピックが開催されることがあり、広野町の J ビレッジも震災前の状態に整備され、スポーツイベントが開催されています。原発事故の非常事態宣言は解かれていない状況にも関わらず、目に映る町の風景は、原発事故以前の様子と同じようになってきています。

帰還困難区域の双葉郡の町々は、次々と立ち入りが解除になり居住可能な地域として帰還を促されています。放射能で汚染された故郷に戻って、本当に健康な毎日を送ることができるのか？など人々の不安が目立ちました。

2018 年度のたらちねの事業はそのような複雑な社会的背景の中で実施されました。

見えない・におわない・感じない、環境汚染である放射能の被害は、その実相を実感することが難しく、月日が経つにつれ、さらに複雑に社会や人々の心に影を落としています。

【放射能測定事業】

たらちね測定ラボの 2018 年度の活動は、ガンマ線によるセシウムの測定件数が 1465 件、ベータ線によるストロンチウム 90 とトリチウムの測定件数が 149 件でした。

5 月から液体シンチレーションカウンター測定器のカンタラスを新規導入し、測定器が 2 台になったことで、ベータ線核種の測定件数が前年度の 2 倍に増えました。測定試料の種類は、食材や土壌の測定依頼が多かったガンマ線測定に対し、ベータ線の測定では水が 1 位でした。

人々が、それぞれの暮らしの中で、何を知り、何に気をつけたいと思っているのか、この結果から垣間見ることができます。

これまで、測定器の稼働スケジュールで測定結果が出るまでに 6 か月～1 年間、お待たせしていたベータ線核種測定の問題は、機器の導入によりある程度解決することができました。現在は 3 か月程度の待ち時間で結果をお渡しすることができます。

しかし、この測定器を維持活用するために、毎年 400 万円の資金がかかります。

そのための資金の確保は今後も継続的に努力することが必要であり、課題でもあります。

測定の技能面は、現場スタッフの粉骨砕身の努力と大学や研究機関の専門家のサポートを

受け、日々向上してきました。

また、人事面のシステムの改定により、測定者と測定依頼者のホットラインを構築することができ、地域の人々とたらちねの関係が、よりカジュアルな形で協力し合えるものとなりました。

海洋調査、海砂測定、ダストサンプラーによるいわき市内の学校・幼稚園・保育園の塵埃測定、TEAM ママベク子どもの環境守り隊のママたちとの連携測定など、多くのボランティアのみなさんと協力し、子どもたちをはじめとする地域の人々の役に立つ活動を実施することができました。

ガンマ線測定結果

総測定件数	1465
食材	957
土壌	282
資材	98
植物	90
水	38

ベータ線測定結果

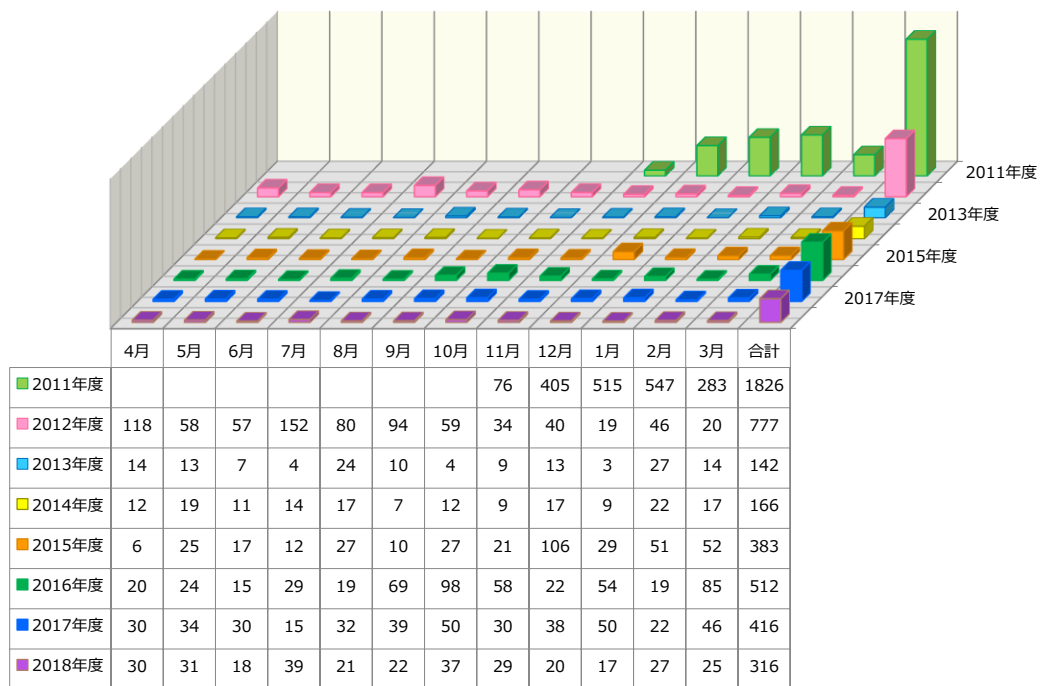
総測定件数	149
水	59
食材	41
土壌	41
植物	6



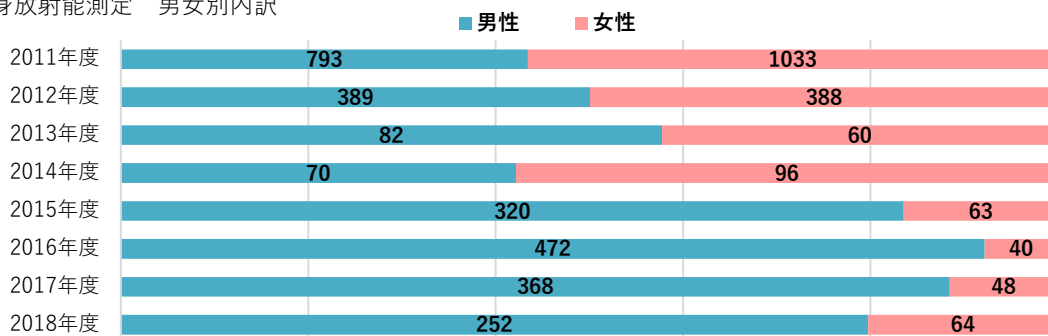
たらちねでは 2011 年 12 月からホールボディーカウンターによる人体放射能の測定をしています。開所時には子どもや女性などが測定を希望する姿が多く見られましたが、現在は除染関係や双葉郡のインフラ整備の事業者の方たちの測定希望が目立っています。

双葉郡は放射線量の高い地域であり、危険な場所での作業が行われていることが想定されます。ホールボディーカウンターは、尿中セシウムの測定と比較すると測定の下限值が高く、人体内の詳細な測定をするには向いていませんが、緊急対応の目安測定としては有効です。人が長い時間とどまることのできない高線量地域で労働作業が行われており、その復興現場の実情を考えると、ホールボディーカウンターによる人体放射能測定はまだまだ必要な測定であるといえます。

全身放射能測定 受検者数 2011 年度～2018 年度まで 4,538 名



全身放射能測定 男女別内訳



【甲状腺検診プロジェクト】

たらちね甲状腺検診プロジェクトの 2018 年度は、福島県内および近隣の放射能汚染地域で 16 回開催し、877 名の検診を行うことができました。

担当の医師は、2013 年からご協力をいただいているボランティア医師のみなさんです。

それぞれ遠方から御足労をいただいておりますが、この事業は長く継続することが必要という共通の認識をもって、黙々とご尽力くださっております。

福島県の検査では、2012 年 4 月 2 日以降生まれのお子さんの無料検診は行われておりません。2018 年度のたらちね甲状腺検診プロジェクトでは、その年齢層の 174 名のお子さんが受診しました。

原発事故から 8 年が経過しており、事故後に生まれた子どもたちも幼稚園・保育園や小学生の年齢となっています。

たらちねや TEAM ママベク子どもの環境守り隊の土壌測定からもわかるように、学校など児童施設の庭から高濃度のセシウムやストロンチウム 90 が今も検出されております。屋外

活動時の塵埃の吸引など、呼吸からの内部被曝も心配される状況が続いています。

甲状腺検診を受診する人が年々減っているという現状はありますが、セシウムやストロンチウム 90 などの危険な核種の半減期が 30 年であるという科学的事実をみても、実際の放射能汚染は今も続いており、事故時との比較でも大きな変化はありません。

その反面、人々の「気をつける」意識は薄れており、注意を怠ることで被曝のリスクは高まっています。

これから、ますます、この状態は加速されると思います。

したがって、今後も、地道に甲状腺検診を継続実施し、子どもたちの健康を見守っていききたいと思います。

2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日		
月日	場所	受診者数
2018 年 4 月 22 日	福島市チェンバおおまち	45
5 月 12 日	宮城県角田市民センター	62
6 月 2 日	沖縄げるまキャンプ	19
6 月 30 日	宮城県白石中央公民館	94
7 月 21 日	田村市船引まち子ちゃんの店	31
8 月 26 日	米沢市青空保育たけのこ	46
9 月 9 日	白石中央公民館	79
9 月 17 日	たらちねクリニック	86
10 月 27 日	たらちねクリニック	28
10 月 28 日	二本松福祉センター	84
11 月 24 日	パルシステム東京本部	58
12 月 8 日	パルシステム東京国立市商工会館	23
12 月 9 日	パルシステム東京本部	58
2019 年 1 月 19 日	北茨城市中郷町多目的ホール	51
1 月 20 日	北茨城市中郷町多目的ホール	23
2 月 11 日	伊達市保原交流会館	32
3 月 17 日	須賀川市勤労青少年ホーム	58
合計		877

2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日	
2012 年 4 月 2 日以降生まれ	受診者数 174 人

【たらちね・こども保養相談所】

たらちね・こども保養相談所の活動は、2011年の原発事故による放射能汚染で、のびのびと自然体験ができなくなった子どもたちの心身を守ることを目的としています。事業内容は、保養案内、参加者の募集、送出し準備や保養がなぜ必要かなどの説明会の実施が主なものです。

2018年度は認定NPO法人沖縄・球美の里とイタリアのオルテ・デイ・ソーニとの連携事業を中心に事業を展開しました。

原発事故から8年が経過し、その間、多くの育ち盛りの子どもたちが十分な自然体験をすることができないまま成長しています。

体力の問題や心の問題など、自然体験の不足が子どもたちの心身の健康にマイナスの影響を及ぼすことが考えられますが、それらの状況を少しでも改善するために保養が有効であると考え2012年からこれまで、事業を実施してきました。

2017年度からは保養の前後の尿中セシウムの測定も実施し、保養の科学的効果を可視化し確認できるよう努めてきました。

沖縄・球美の里の保養は2018年度15回実施し、子ども506名、保護者103名の合計609名が久米島の自然を満喫し自然体験を経験してきました。

また、イタリアのミラノ市内の施設で実施したオルテ・デイ・ソーニの保養では、1ヵ月間という長期間、恵まれた自然の中で、20名の子どもたちが、地元イタリアの子どもたちと共に過ごすという実りある時間を体験してきました。

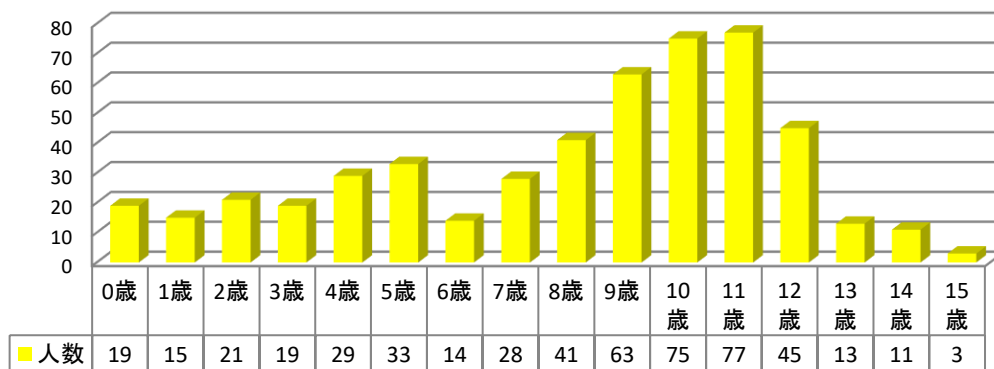
原発事故による環境の汚染がなくなるのは数百年後か、あるいはそれ以上かかるといわれています。今の子どもたちが大人になり、その後の世代が生まれても汚染は続きます。

放射能による汚染が無くなるまで、子どもたちの保養は必要不可欠なものであり、今後もできるだけ多くの子どもたちが、保養に参加できるよう努力していきたいと思いをします。

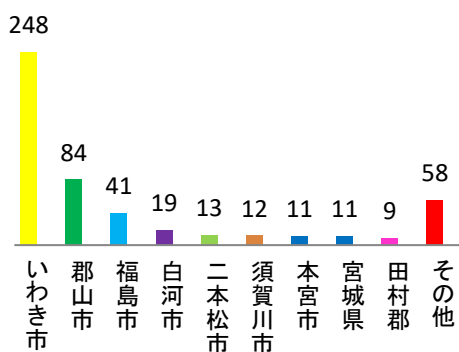
保養期間	子ども	保護者	合計
第89次4月14日－4月21日	23	14	37
第90次5月1日－5月8日	37	10	47
第91次5月22日－5月29日	26	11	37
第92次6月20日－6月29日	23	14	37
第93次7月19日－7月27日	50	0	50
第94次8月3日－8月11日	50	0	50
第95次8月17日－8月25日	50	0	50
第96次10月3日－10月12日	25	9	34
第97次10月20日－10月27日	11	7	18
第98次11月12日－11月25日	23	13	36
第99次12月20日－12月28日	50	0	50
第100次2019年1月2日－1月9日	49	0	49
第101次2月11日－2月20日	21	12	33
第102次3月3日－3月10日	18	13	31
第103次3月24日－4月1日	50	0	50



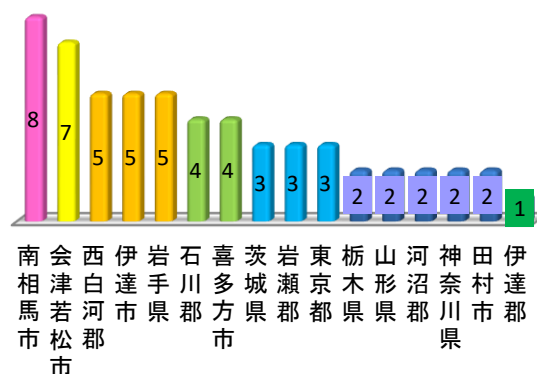
《参加者年齢内訳》 ※子どものみ



《参加者地域内訳》 ※子どものみ



《左図・その他の内訳》



【こころのケア事業／あとリエ・たらちね】

たらちねでは2011年の開所以来、放射能の測定を中心とした事業を展開してきました。見えない・におわない・感じない、放射能による被曝被害は人々の心に大きな不安をもたらしました。また、目に映らない環境汚染は、感じる人の感性で被害の大きさが決まるため、夫婦や家族であっても同じ気持ちを共有することはできませんでした。そこから大きな心の分断が生まれ、人々は苦しんできました。

放射能の測定は、放射能を可視化し内部被曝に気をつけることができると共に、見えない放射能を見えるようにすることで人々に共通の意識と対話をもたらすことができます。私たちは、測定を科学的な効果があるだけではなく、人々の心を支える事業だと考えてきました。

原発事故から8年が経ち、今やっと語れること、今やっと見えてきたことがあります。事故当時、多くの母親は放射能の被曝に怯え、分断するコミュニティの中で、胎児を守り必死になんとか出産し子育てをしてきました。人にはわからない過酷な体験が精神的な疲労

となり今に続いています。また、大人だけでなく、その不安定な状況の中で生まれ育った子どもたちの心にも大きな負荷がかかり、消耗があることがわかりました。

たらちねでは、これらの実情を受け、小児・思春期精神科の専門医である渡辺久子医師の協力を得て、被曝後の世界に生きる母子の心の問題と向き合う活動をはじめました。

子どもたちのための施設を開設し、箱庭遊びを中心とした遊びの力を借りて子どもや母親の心の活性化を促すための事業です。

さらに、心の疲れが体に影響を及ぼすこともあるため、身体心理マッサージの教育を受けたセラピストが子どもたちのマッサージを行うメニューも準備しました。

今後も引き続き、学びを深めるため研鑽を積んでいきたいと思います。

2018年度は、すでにこの施設とメニューを利用している母子もいます。

こころのケアに関わることは、これまで見えない環境汚染と向き合い、測定から人々の心を支えることを目的に進んできたたらちねだからこそ、向き合えることだと考えています。

子どもたちが心を輝かせて成長することは、私たちの大きな財産であり、そうなるよう努めることは、世の中の大人の大切な責任です。

今後も、多くの人々と連携し協力しながら、実施していけるよう努力したいと思います。



【たらちねクリニック】

2017年6月にオープンした、たらちねクリニックは、2年目となりました。

ビルの3階にあるという不便な立地からオープン当初は、クリニックがあることを知ってもらうことにも苦勞をしました。

しかし口コミを中心にクリニックの活動が人々の間に浸透し、2018年度の患者数は前年の2倍近くとなりました。

子どもたちの健康を見守る子どもドックの利用者も増えています。

尿中のセシウム測定を受けて子どもの健康状態を知りたいという保護者も多く、世の中全般では問題意識が風化する一方で、子どもを守るという意識が強く存在することを実感しました。

被曝後の世界では、子どもたちの健康と被曝の影響について不安を抱える保護者は少なく

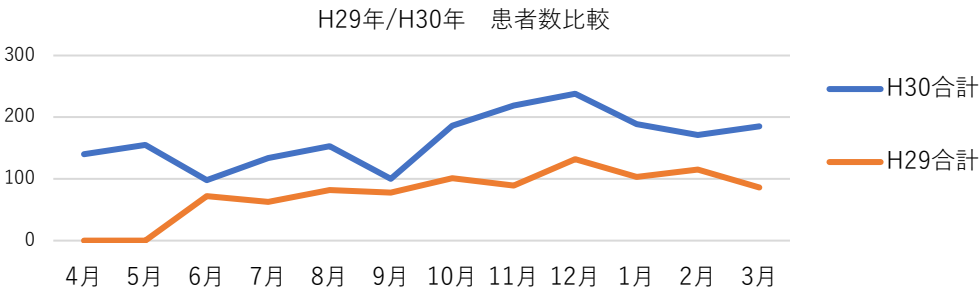
ありません。しかし、子どもたちの健康に被曝の影響はあるのか？ということを楽しみに相談できる医療機関が少ないということが母親たちの悩みでもあり、コミュニティに閉塞感をもたらしている原因でもあると思います。

被曝の問題を医師と対等に語るには、科学的知識を含め理論武装しなければ成り立たない難しさがあり、母親たちが医療機関でこの問題について語ることが、被曝後の世界では高いハードルとなっていました。

そんな中、たらちねクリニックでは「聞いてはいけないことはない」「ここでは聞きたいことを聞くことができる」「話したいことを話させてくれるドクターがいる」という母親たちの声が多くあり、安心した気持ちでクリニックを利用している人々の姿がありました。原発事故が起きた時、情報を知らせてもらえず、命を守ることを第一に考えて行動することができなかった被災地の人々は、命と心の尊厳について敏感であり、それゆえに傷つくことも多くあります。

医療の現場は、人を大切に思いやることが率直に伝わる現場であり、そこには原発事故で壊れたコミュニティを再生する大きな力があると感じます。

たらちねクリニックにできることには限りがありますが、毎日を無駄にせず、心が豊かになるつながりを大切に、運営をしていきたいと思っています。



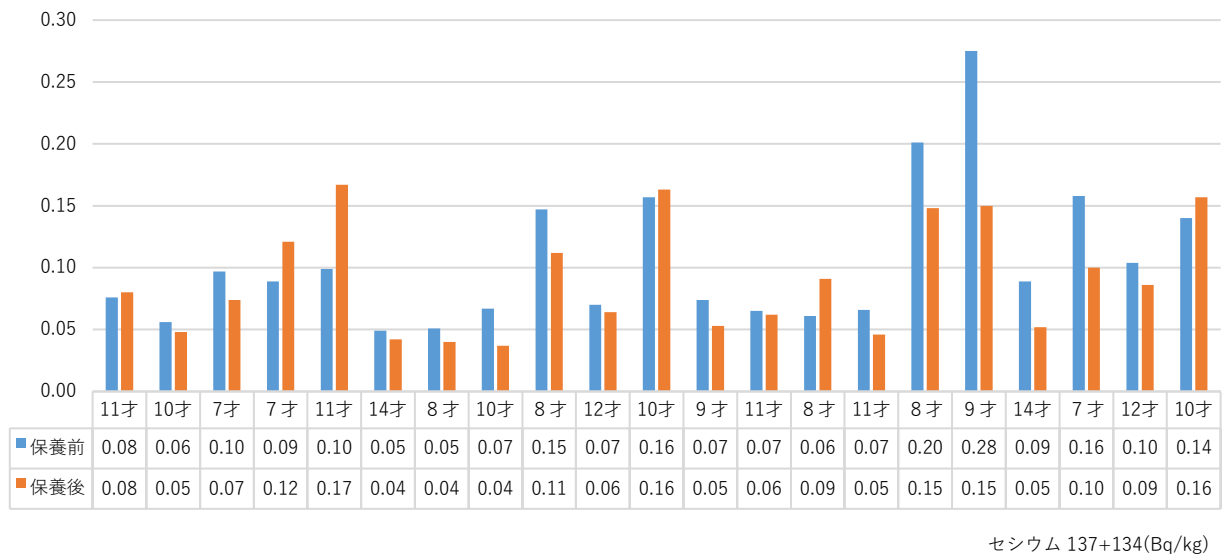
患者利用人数	H30 合計	H29 合計	割合
4 月	140	0	
5 月	155	0	
6 月	98	72	136%
7 月	134	63	213%
8 月	153	82	187%
9 月	100	78	128%
10 月	186	101	184%
11 月	219	89	246%
12 月	238	132	180%
1 月	189	103	183%
2 月	171	115	148%
3 月	185	86	215%
合計※	1673	921	184%

※前年比の比較のため 6 月～11 月の合計

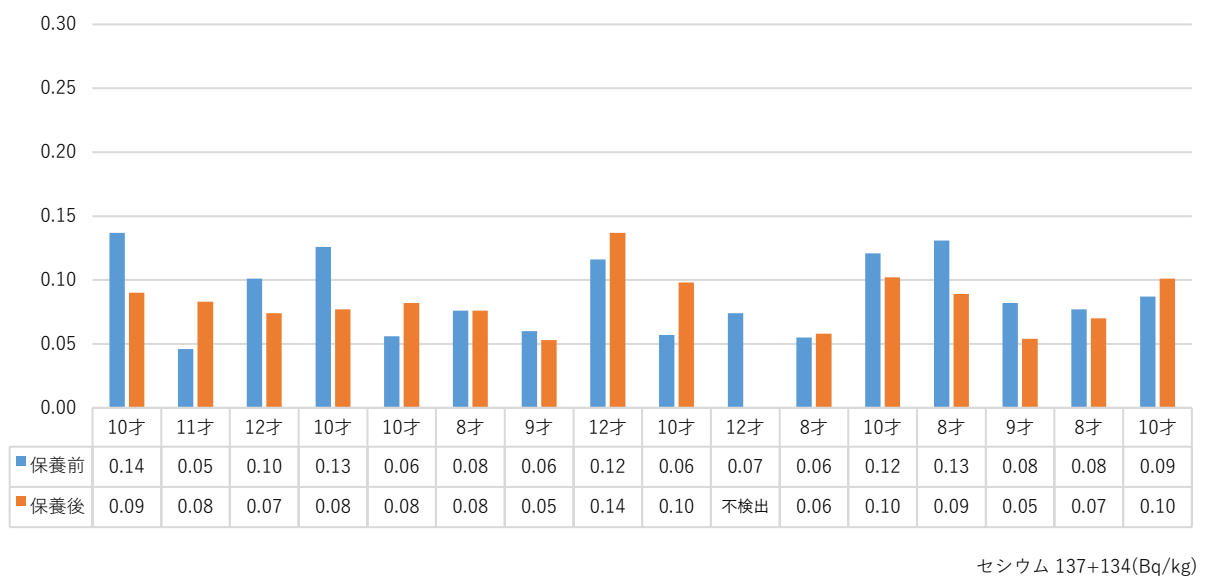
2018.4月～2019.3月 たらちねこどもドック利用者数	人数(人)
甲状腺検診	115
WBC	45
尿中セシウム	319
聴力	42
採血	41
尿一般	38
心電図	36
合計	636



男児 保養前後 尿中セシウム測定結果



女児 保養前後 尿中セシウム測定結果



【講演会・勉強の実施】

《2018 年度に行った勉強会・講演会事業概要》

○2018 年 9 月 8 日 西尾正道講演会 開催

場所：いわき市総合福祉センター 13：00～16：00

講師：西尾正道

参加者：90 名

○2018 年 10 月 27 日 西尾正道講演会 開催

場所：郡山市中央老人福祉センター 14：00～16：30

講師：西尾正道

参加者：50 名

○2019 年 3 月 2 日 たらちね測定報告会&今中哲二講演会 開催

場所：いわき市総合福祉センター 13：00～16：00

講師：今中哲二

参加者：100 名

【チャリティコンサート】

○2018 年 10 月 22 日

土田英順 東日本大震災チャリティ・チェロコンサート in Iwaki

場所：いわき芸術交流館アリオス音楽小ホール

来場者：90 名

【見学者の受け入れ】

たらちねは国内外の個人・団体の見学者の受け入れを行っています。2018 年度は 340 名以上の方が見学・取材に来られました。

見学者の受け入れの意味も、この 8 年で形を変えてきたと感じています。

初期の頃は、福島の実情を知ってもらいたいということでしたが、現在は次世代に伝えるための伝承へと変化しているように感じます。2011 年の開所時には想像もできなかったことです。あの日から 8 年が経ち、見学者の中には事故時に小学生だった人たちの訪問もありました。

彼らは「大人はなぜ自分たちに真実を伝えようとしないのか」ということを真剣に考えています。

世界には、多くの原発があり、一度事故が起きると甚大な被害をもたらし、その上で放射能測定、甲状腺検診、保養、こころのケアやクリニックの活動など、これだけのことをしなければなりません。

見学者のみなさんには、そのことをお伝えすると共に、事故が起きたからではなく、起きる



Pages

5

ABC

Log In

Search

1

ABC NEWS

Home

Just in

Australia Votes

World

Business

Sport

Science

Health

Arts

Analysis

Fact Check

Other

Print

Share Email

Facebook

Twitter

More

Fukushima's mothers became radiation experts to protect their children after nuclear meltdown

By North Asia correspondent [Jaky Sharma](#) and Yumi Asada in Fukushima

Posted Sun at 5:00am



PHOTO: The mothers test everyday items including rice, vacuum cleaner dust, seafood, moss and soil for radiation.

Inside a laboratory in Fukushima, Japan, the whirr of sophisticated equipment clicks, beeps and buzzes as women in lab coats move from station to station.

They are testing everything — rice, vacuum cleaner dust, seafood, moss and soil — for toxic levels of radiation.

But these lab workers are not typical scientists.

They are ordinary mums who have built an extraordinary clinic.

"Our purpose is to help children's health and future," says lab director Kaori Suzuki.

In March 2011, nuclear reactors catastrophically

RELATED STORY: Japan begins massive nuclear pool clean-up after Fukushima disaster

RELATED STORY: Japan undecided on what to do with 1.7 million tonnes of radioactive water

RELATED STORY: Japan acknowledges first radiation death from nuclear plant hit by tsunami

Key points:

- Mothers in Fukushima set up a radiation testing lab because they didn't trust government results
- The women test food, water and soil and keep the public informed about radiation levels
- A major earthquake and tsunamis caused a nuclear accident at the Fukushima power plant in 2011



Environment News

'Tight for the Tight': Oil-drilling opponents take protest to chilly Norwegian sea

Beachcombing for the kind of buried treasure you don't want to find

'Traffic light' for beaches: Could a high-school invention stem the tide of drownings?

TOP STORIES

- Australia's most left-leaning and right-leaning seats revealed
- Girl's finger cut off, boy held in isolation for 23 days: The Watch House Files
- Police visit family from A-League game after row over disabled toilet
- When do I need lender's mortgage insurance to buy my house?
- Analysis: RBA and Morrison Government clash on economy, unite to stop housing slide
- 'Jann jans thing would never work in my house': Why the Bandwest Investor isn't for everyone
- Flu outbreak kills 17 in SA nursing homes go into lockdown
- How the federal election will change the taxes you pay
- Analysis: What's in it for us? Saturday, we're facing a three-way freefall from China
- SPORT: Mexican wrestler who starred in Nacho Libre dies in heart of London election
- How is Europe like me, expected to survive on Newland?
- Maghan and Harry pot tribute to 'lost' mothers as they release new *Archies* photo
- Man allegedly drags woman to die in a headlock during attempted abduction
- Fact Check: Are a million Australians doing two jobs and a million underemployed?
- Shane Douglas: Bruce Swerford



PHOTO: Girls like Megu could be at greater risk than boys from radiation exposure. (ABC News, Jake Shinner)

"Even if I say there is nothing to worry medically, each mother is still worried," he says.

"They feel this sense of responsibility because they let them play outside and drink the water. If they had proper knowledge of radiation, they would not have done that," he said.

Mums and doctors fear for future of Fukushima's children

After the Chernobyl nuclear disaster of 1986, the incidence of thyroid cancers increased suddenly after five years.



PHOTO: Dr Noso travels across the country to check up on the children of Fukushima. (ABC News: Yumi Asada)

以上、2018年度認定NPO法人いわき放射能市民測定室たらちねの事業報告といたします。